

指導変革の軌跡

そのとき
教師はそして生徒は
どう変わったか

西宮高校・国際経済科



設立	1919年（大正8年）
形態	共学/普通科、国際経済科、音楽科
生徒数(一学年)	約40名(内、国際経済科40名)
00年度入試実績(国際経済科のみ)	国立大には、大阪市立大、神戸商科大に各2名が合格。私立大には、関西大5名、関西学院大4名をはじめ、延べ20名が合格。

兵庫県立
西宮高校

創立81年。95年、商業科が国際経済科に改編。国際経済科は国際化・情報化社会に対応しながら豊かな人間形成を目指し、大学受験に対応した普通教科と個性を生かす専門科目を揃え、各種資格取得を支援する学習体制を整えている。部活動は、99年度、陸上部はインターハイに7名出場。駅伝では兵庫県男子3位、女子2位と活躍。英語スピーチ、簿記でも全国大会出場。

西宮高校国際経済科……変革のポイント

自分の頭で考える機会を数多く提供

「社会研修」に出かける前に見学先に関して調査を行う。見学して分かったことを踏まえ、自分なりに考えた結果をレポートにまとめさせている。他の行事でもレポート提出は必須。

問題意識を日常の中でも育成

行事だけではなく日常の機会を捉えて、同科の教師は生徒に問いかけ、問題意識や幅広い視野を3年間かけて育成していく。

3年間の総まとめにあたる「課題研究」

生徒は3年間に自分で考えていく力を磨いてきているので、テーマ設定から論文作成まで、基本的には生徒の自主性に任せられている。

課題研究

現代社会への視野を3年間の指導の中で身に付ける

卒業式を直前に控えた2月中旬、西宮高校国際経済科3年生35名の生徒たちの手に、『平成11年度課題研究』と題された冊子が渡された。生徒一人ひとりが自分の興味関心に基づいて設定したテーマを、調べ、考えた成果をまとめあげた、いわば「卒業論文集」のような一冊だ。この『課題研究』を読み込んでいくと、今時

つて有効需要が増え、それが市場に刺激を与えたことを、ケインズの公共事業政策の理論を基に分析している。阪本さんはテーマ設定について、次のように話す。

「神戸空港建設計画や吉野川可動堰計画の二コースを目にして、公共事業のあり方に疑問を持ったことがきっかけでした。そこでそもそも公共事業とは何かを調べているうちに、ケインズ主義が出てきたんです。一方で江戸時代に関心を抱いたのは、『経済について何か書くなら、江戸時代も面白いみたいよ』という母親の一言がヒントになりました。関連書籍を読んでみると、その時代も公共投資に力を入れていることが分かり、テーマになるのではと思っただけです。同じく99年度卒業生長谷川雅子さんの研究テーマは、「キャラクタービジネス」。自身が銀行預金を始めるとき、数ある中から某銀行を選んだ決め手は、預金通帳がスヌーピーの絵であったこと。それがきっかけで、キャラクターに興味を持ったという。長谷川さんはキャラクターグッズや商品を扱う企業に使用目的のアンケートを送る。その回答を基に各社のマーケティング戦略を分析した。

近年、大学生でさえ

卒業論文のテーマ設定に苦しみ、また内容も稚拙なものが多くなると言われる。そんな中で生徒たちはなぜ柔らかな発想力と論理展開力を身に付けているのだろうか。しかも、大学進学から就職までと高校卒業後の進路はかなり幅広

の高校生に対して一般的に抱かれているイメージが覆されることだろう。よく最近の高校生は文章を書くのを億劫がる傾向にあると言われるが、この冊子に掲載されている論文の文字量は原稿用紙に換算すると25から30枚程度もある。しかも書き飛ばしがなく、起承転結の構成もよく練られている。また、今の高校生は社会的問

い。前国際経済科科長の河合隆廣先生は、「本学科に入学してくるのは、元々意識の高い者が多いんです」と語る。もちろん、それも大きな理由だろう。だが、「日本の経営管理の変化」をテーマに課題研究を書いた岡本光生君はこう話す。「中学校時代は新聞なんて全然読みませんでした。物事をきちんと考えるようになったのは、高校に入ってからです。でもたぶん他の学校に通っていたら、こんな風に自分を伸ばすこと

同科では、情報処理、文書処理、簿記などの授業を行い、幅広い資格取得を奨励。1年次終了時には、簿記検定2級、英語検定2級、情報処理検定2級などをほめる賞が取得する。



前兵庫県立西宮高校国際経済科科長
河合隆廣 Kawai Takahiro
教職歴31年。同校には99年度までの19年在籍。国際経済コース設置当初から中心となって同科を支えた。現在、加古川南高校に勤務。

兵庫県立西宮高校国際経済科
平山 弘 Hirayama Hiromu
本校に赴任して4年目。同校が4校目となる。同科の他の教師と分担して、商業科目を担当。「生徒に語る内容は、口頭から吟味して話すようにしています。」

はできなかったと思います。」

ちなみに、長谷川さんと岡本君は大阪市立大に推薦入試で合格したが、その定員3名の内の2名にあたる。

実は、生徒たちは一朝一夕に完成度の高い論文を仕上げられるようになったわけではない。生徒たちが成長した背景を知るには、彼らが過ごした3年間をたどってみる必要がある。

98年7月、

1学期の期末考査も終わり夏休み直前となったある日、国際経済科の全学年は学校行事の一つである「社会研修」に出掛けた。行き先と目的は、福井県にある関西電力大飯原子力発電所の見学。当時2年生だった阪本さん、長谷川さん、岡本君の3人も、もちろん参加した。

それに先だって同科では、関西電力の社員を招待し、原子力発電に関する説明会を開いてい



課題研究の授業の中では、調査内容をクラスメートの前で発表する機会を設定。発表の際に使う資料は、1年次から培ってきた情報活用能力を活かし、生徒全員がパソコンで作成

た。そして当日の発電所見学。原発を巡っては、推進派と反対派が議論を二分しているが、電力会社は言うまでもなく推進組であり、盛んにPR活動を行っている。彼らの巧みな説明に対して、生徒の中には見学後の感想として「やっぱり原子力は日本にエネルギー政策に不可欠なものだと思った」と話すがたくさん出てきた。だが河合先生は、「こうなることを最初から見越していた。そこがが教師の出番」だと思っていたと言つ。河合先生は賛成意見の生徒たちに向かって、「確かに大飯原発の安全管理は徹底されているみたいだね」と前置きした後、矢継ぎばやに質問をぶつけた。「でも廃棄物処理の課題は残されているんじゃないかな」「プルトニウムはそのまま転用すると原爆になるけど、それは問題ないの?」「電力がたくさん使われているのは大阪や神戸なのに、原子力発電所が福井にあるのはなぜだろう?」「一方、反対意見の生徒には別の視点から疑問を提示した。「現代社会は、電力なくしては成り立たなくなっている。発電電力量の半分近くを原子力が占める中で、本当に原発をストップさせることは可能だろうか」。河合先生に問い返され、生徒たちは自分なりに事実を探るようになっていった。岡本君も「最初は処理問題などが大変だから、火力とか自然エネルギーを利用すればいいという意見でした。でもそんなに簡単なことではないことがだんだん分かってきました」と話す。最終的に提出された生徒からのレポートは、原子力発電への賛成論、反対論様々だった。河合先生は言つ。

うに」と指導する。クラスメートによるレポートの相互評価も行われ、「報告文は、3年間ですぐにだけ提出したか思い出せないくらいに多い」(長谷川さん)と言つ。文章力は、「こうした行事を利用して徹底的に鍛えられていく。だが、これらの取り組みをいくら活発に行つたとしても、それが単発のイベントに終わってしまつては、後には何も残らない。生徒の成長

「安易に賛成、反対を語る生徒には、でもこのことはどうなの?」と問い返すと言葉が止まつてしまつ。でも、そこから自分自身の頭で考えるようになるんです。教師はそのきっかけを作る問い掛け役だと思つています。その先の結論は、生徒自身が出していけばいいんです」

自分の頭で考える。

そんな機会を、国際経済科では生徒たちに数多く提供している。「社会研修」は元々希望者だけが参加していたものだったが、一つの事象をいろいろな角度から見ることのできる力を養つたために、98年度から全生徒を対象としたものに拡大した。99年には生徒を3班6グループに分けて、神戸税関、大阪造幣局、読売新聞社を訪問

'99年度課題研究テーマ一覧(一部抜粋)

- ・アジア通貨危機
- ・現代の国際貿易～自由貿易はなぜ必要か～
- ・香港返還の裏側
- ・サウスウエスト航空墜落の経営
- ・世界の子どもたちとユニセフ
- ・経営心理学に基づくマーケティング
- ・プロ野球による経済効果
- ・心の産業 東京ディズニーランド
- ・フランチャイズシステムの発展
- ・100円ショップの秘密
- ・マクドナルドvsモスバーガー
- ・食品添加物の常識・非常識
- ・ごみを減らす社会に
- ・「本」の今までとこれから
- ・マルチメディア時代の著作権
- ・字幕という日本語
- ・少年犯罪

西宮高校国際経済科のさまざまな取り組み

社会人講師による教養講座
大学教授や産業界の第一線で活躍する方を招いた教養講座を年4回開催。国際情勢や国際社会における日本のあり方、人としての生き方など、生徒たちの関心に沿ったテーマが選ばれている。99年度には、インターナショナル・パシフィック・カレッジ理事長大橋博氏による「グローバル社会に生きる」、(株)電通恒産サービス人材派遣課長芳野恭輔氏による「現代社会と広告活動」、日本通運㈱大阪旅行支店次長の山崎正雄氏による「異文化理解の大切さと難しさ」、神戸大医学部精神神経科講師の安克昌氏による「経済的な豊かさ」と外傷ストレス障害社会の現状」といった講演が行われた。

国際理解教育
国際経済科は「国際社会に通用する高い知性と幅広い感性を培う教育」を目標とし、語学教育にも力を入れている。英語の授業では2名の外国人教師を招いてコミュニケーション能力を育成、選択科目にフランス語や中国語の授業も用意。オーストラリア留学生との交歓会も実施する一方、日本文化への造詣を深めるため能楽鑑賞会などの場も設ける。

を支える一番の力ギは、恐らく教師からの日常的な語りかけにある。例えば、河合先生は生徒たちに世界地図を見せるといふ。そしてアフリカを指さして、「何かおかしくないか」と問い掛ける。生徒が気付いて発言する。「国境線が真っ直ぐになっていませう」。それをきっかけに河合先生は、「ヨーロッパ諸国が植民地政策の下、自らの都合で国の線引きをしてみました。そのために民族の文化が切り裂かれ、紛争の元凶になっていることを示す。こうして生徒たちは、教科書を進める授業では決して身に付かない問題意識や広い社会的視野を、日常の中で少しずつ獲得していく。

「課題研究」は

そんな3年間の総仕上げにあたる。「課題研究」とは専門学科に設置されている科目で、「高等学校学習指導要領」によると、「課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図ると共に、問題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育てる」ことを目標としたものだ。08年度からすべの高校で実施される「総合的な学習の時間」の隣接科目と考えていこう。西宮高校国際経済科では、3年次に3単位を履修することになっている。指導には、本科の教師3人によるチームティーチング制で取り組んでいる。同科の平山弘先生は次のように語る。「1学期は、さまざまな社会問題に関するテレビ番組を見せたり、過去の先輩たちの『課題

した。生徒たちは訪問にあたって、事前にインターネットで調べなどして、質問事項を用意して臨んだ。例えば貿易の仕事に興味を持っている生徒でも、貿易と関係が深い税関についての知識はほとんどないだろう。社会経験が乏しく、「職業」や「職場」といっても表面的なイメージしか持たない生徒にとっては、刺激の多いものとなったはずだ。

また、「社会人講師による教養講座」は年に4回組まれている。生徒たちの問題意識を喚起するような人物とテーマが選ばれる。さらにオーストラリア留学生との「国際交流会」や、「能楽鑑賞」も定期的に開かれている。各行事の後には必ずレポート提出が待っている。同科の教師は、「感想ではなく意見を書くよ

研究」の成果をレポートとしてみんなの前で発表させるなどしながら、生徒一人ひとりがテーマ探しをする期間にしています。実際にテーマを設定して、調べ学習に入るのは夏休み明けからですね。2学期に入ると、生徒たちは個々に図書館で文献を読んだり、コンピュータ室でインターネット検索を始める。この種の授業でしばしば教師が苦慮するのが、生徒との距離の置き方である。生徒に細かく指示を与えるか、それとも生徒を突き放すか。同科の教師は「課題研究」の授業の中で、どのような距離を保つて指導しているのだろうか。

「3年生にもなれば、生徒は自分自身で考え、切り開いていく力を既に身に付けてきています。教師の役割は、生徒が狭い見方しかできていないときに、違う視点を提示してあげることですね」(平山先生)
「ただし」と平山先生は付け加える。「こういった取り組みは、いきなり導入しても絶対に成功しません。1、2年次での様々な積み重ねがあつて、初めて成り立つものですよ」

生徒は急には成長しない。しかし3年間を見通してじっくりと指導をすれば必ず成果が挙がることを、西宮高校国際経済科を巣立った生徒たちが体現している。

